

# 保育者の困り感への対応における 知識・技術獲得の現状と課題

—課題解決のための情報収集とソーシャルスキルに着目して—

井手裕子\*・伊勢 慎\*\*・池田孝博\*\*\*

**要旨** 近年、社会的背景の変化による保育者への要求の多様化に伴い、保育者への知識・技術の向上が求められている。一方で、これらの知識・技術の向上に重要であると考えられる保育者の自己研鑽における課題や支援のニーズに着目した研究は見られない。

本研究では保育者が抱える日々の困り感と、困り感に対応するための知識・技術獲得方法について保育現場で働いている9名の保育者にインタビューを実施し、質的分析法を用い分析を行った。その結果、子ども・保護者対応における言語化が困難な困り感の対応の知識・技術獲得に課題意識があり、その困り感への知識・技術の収集や相談は他者に頼っていることが明らかになった。

また、これらの相談や指導の影響は個人の能力や園体制により左右されるとの認識がある一方で、実際の知識・技術の指導や相談対応で必要となる具体的なスキルや園体制の認識は曖昧であり、保育の知識・技術獲得方法だけでなく、保育者間の指導や相談を円滑に行う上で必要なソーシャルスキルへの支援が潜在的なニーズとして存在していることが明らかとなった。

**キーワード** 困り感 課題解決 情報収集

## 1. 研究の背景

### 1-1. 社会的背景の変化による保育者への要求の多様化と負担感の増加

近年、少子化や核家族化、地域の繋がりの希薄化の進行、女性の社会進出に伴う共働き家庭

の増加を背景に、子育てに関わる社会の状況は大きく変化している<sup>1)</sup>。こうした社会の変化を受けて改訂された保育所保育指針では、さらなる保護者支援と地域子育て支援、特別な配慮を必要とする子どもへの指導計画作成、虐待の早期発見、食物アレルギーにおける組織的な体制

\*精華女子短期大学幼児保育学科・講師

\*\*福岡県立大学人間社会学部・講師

\*\*\*福岡県立大学人間社会学部・教授

の構築・対応、災害への備えを含めた安全な保育環境、職員の資質向上に向けた研修の充実とその実施体制の強化を求めている<sup>2)</sup>。また、同様に幼稚園教育要領においても、一人一人の幼児理解に基づく評価の実施、言語活動の充実、障害のある幼児や海外から帰国した幼児など特別な配慮を必要とする幼児への指導の充実、カリキュラム・マネジメントの実施、「社会に開かれた教育課程」として預かり保育や子育て支援を通じて施設機能を解放することが記載されている<sup>3)</sup>。幼保連携型認定こども園教育・保育要領においても同様のことが記載され、保育者への要望は多様化・複雑化している<sup>4)</sup>。

社会的背景の変化に伴い、幼稚園教諭や保育士、保育教諭（以下、保育者と示す）に求められる役割は質・量ともに拡大し、保護者の要望に対応するため、日々の研鑽や保育の質向上の努力が求められている。一方で、保育現場においては、業務量の拡大や内容の多様化・複雑化により、以下のように保育者の負担感が増しているとの指摘がある。

細井<sup>5)</sup>は、保育・介護労働者の健康と労働に関する調査の中で、保育労働者の約8割がストレスを感じており、その原因として「職場の人間関係（57.3%）」が最も多く、次いで「保護者や家族への対応（41.5%）」、「仕事の量（39.0%）」、「仕事の内容（26.8%）」、「仕事の能力（20.7%）」が挙げられたことを報告している。上村<sup>6)</sup>は、保育士のメンタルヘルスに関する調査の中で、心身に疲れがみられる保育士が一般成人女性の約2倍の割合で存在し、保育士の職場環境が精神的に負担の大きい職場であることを指摘している。また、新任・中堅・ベテランのどの時期においても心の疲労度が高く、特に新任保育士は危機的状況にあることを

明らかにしている。

このような保育者の保育実践上における困難感、対応に悩むこと、負担に感じることなどの感情を本研究では、木曾<sup>7)</sup>に依拠し「困り感」とする。例えば、星野<sup>8)</sup>は保育士や幼稚園教諭を対象とした幼稚園教諭免許更新講習の受講者への4年間のアンケート調査により、乳児や特別な支援の必要な子どもに対する保育への困り感や研修要求が高いことから、認定こども園化の進展により困り感を抱える保育士が増加しているのではないかと指摘している。また、三好<sup>9)</sup>は保育所保育指針の改訂に伴い、中堅からベテランの保育士において指導計画の作成に混乱が生じたこと、保育計画の必要性の意識や記載方法の変更に対する混乱がベテランほど高いことを報告している。

さらに、施設や経験年数によっても困り感を感じる内容が異なることが報告されている。柳<sup>ら<sup>10) 11)</sup></sup>はいくつかの施設、年齢を跨いで困り感と研修ニーズの調査を行い、施設や年齢によって研修ニーズの違いが見られることを指摘している。これらの困り感や研修ニーズの違いは、そのまま保育現場への知識・技術支援ニーズの違いにも直結していると考えられる。

## 1-2. 保育者に求められる知識・技術向上のニーズと日常的な自己研鑽の重要性

柳らが指摘した保育者へのニーズに対して、保育者が知識・技術不足を感じていることが報告されている。例えば、古橋<sup>ら<sup>12)</sup></sup>は多くの保育者が専門性の不足を感じており、研修が必要と自己評価していたことを指摘している。星野<sup>ら<sup>13)</sup></sup>も、特別な配慮や支援が必要な子どもへの対応に強い困り感と研修要望があることを指摘している。このような保育者の知識・技術への

困り感への対応として、「保育所保育指針の改定に関する議論のとりまとめ」においては、日々の業務の中で自己研鑽や保育者間の指導により専門性を向上させることと同時に、園内外での研修を充実させることが重視されている<sup>14)</sup>。

本研究における自己研鑽とは、保育者自身が日々の保育を通じた疑問、問題の解決や新たな知識・技術の習得などの目的を持って行う自主学習のことである<sup>15)</sup>。園内研修とは園内で実施する研修のことで、症例検討会や外部講師を招いた講演会などがある。園外研修とは、保育に関する知識・技術を園外で学ぶ研修のことで、初任者研修や主任研修、園長研修、教員免許状更新、公的機関や民間企業が開催している研修などがある。

園内研修において、国立教育政策研究所が2017年に行った調査<sup>16)</sup>では、調査対象の半数以上の園で、研修が一月に一度未満の頻度であることが報告されている。野崎<sup>17)</sup>は研修の重要性は明らかにされているものの、園によって実施頻度に大きな開きがあることを指摘している。鈴木ら<sup>18)</sup>は、研修時間の確保や全員参加の困難さを課題として指摘している。また、2017年度から保育の質向上を目的として保育士などキャリアアップ研修制度が導入されているが、対象者が限定されており、こちらも全保育者を対象とした取り組みとみなすことは困難と言われている。このため、保育者の知識・技術向上には保育者による自己研鑽や園内の同僚からの指導による影響が大きいと推定される。本研究では研修以外での知識・技術獲得のための情報収集に着目して調査を行う。

### 1-3. 保育者の知識・技術獲得における課題明確化の必要性

これまでも、研修以外での保育者の知識・技術獲得のための情報収集に関する研究は行われている。例えば保育者間の指導については、小澤ら<sup>19)</sup>が園内の技術伝承について調査を行い、言語化の困難さから知識・技術の伝達が困難であることを指摘している。保育者の抱えている課題として、川島<sup>20)</sup>は保育能力の客観的な評価指標がないことを挙げており、言語化が一つの壁になっているといえる。これらの対応策として、阿部<sup>21)</sup>による保育者の言語化スキルの向上を支援する必要性の指摘や、押山ら<sup>22)</sup>によるベテラン保育者の暗黙知の可視化の試みがなされている。一方で、吾田<sup>23)</sup>はベテラン保育者が新任保育者との間に考えや感覚のギャップを感じ、新任保育者の育成に困難を感じていることを報告している。

言語化以外の課題も混在していることが予想されることから、保育者が実際に指導する、指導される際の意識や困り感についての調査を行い、どのような課題があるのか、明らかにする必要があると考える。

一方で、困り感が生じたときの保育者の自己研鑽については、保育者が独力で調べ、研修で学ぶというケースが少なかったこと、自分が必要な知識・技術を得る方法を保育者養成校で学んでこなかったことが大きな原因であると小川ら<sup>24)</sup>は指摘している。また、原ら<sup>25)</sup>の研究でも独力で知識収集するケースは少なく、必要とする知識・技術を調べることに何らかの課題があることが窺われる。

上記で触れたように保育ニーズは多様化・複雑化しているため、従来の見て学ぶ方法以外にも、保育者が自ら情報を収集して学んでいかな

ければならない。情報化が進んだことで情報を手に入れやすくなっている今、自分で調べる情報収集がこれまで以上に重要になっていると想定されるため、自己研鑽のための知識・技術獲得における情報収集という視点においても実態調査が必要と考える。

以上より、本研究では、保育者が自主的に学習する際にあたっての知識・技術獲得のための情報収集とその情報収集における課題について着目してインタビューを行うことで、保育者が知識・技術獲得のための情報収集にある課題をより詳細に明らかにすることを目的としている。

## 2. 研究の目的

本研究では、保育現場で働く保育者へのインタビュー調査を通して、保育者が感じている保育実践上における困り感と困り感の対応における知識・技術獲得のための情報収集方法を明らかにすることを目的とする。加えて、知識・技術獲得のための情報収集における課題分析と具体的な支援策の検討を目的とする。

また、施設や経験年数による共通点や相違点を明らかにするため、幼稚園、保育所、認定こども園に勤務する新任、中堅、ベテランの保育

者を調査協力者としてインタビューを行う。

## 3. 研究の方法

### 3-1. 調査協力者

W県のX私立幼稚園に勤務する幼稚園教諭3名、Y私立保育園に勤務する保育士3名、Z認定こども園に勤務する保育教諭3名にインタビュー調査を行った。高濱<sup>26)</sup>の研究に基づき、調査協力者を経験年数2～4年目を新任、5～10年目を中堅、11年以上をベテランとして分類し、各園につき新任保育者1名、中堅保育者1名、ベテラン保育者1名ずつ、3園合わせて計9名とした。経験年数に分けて調査する理由は、経験年数による困り感や課題解決方法の共通点や相違点を明らかにし、課題解決のスキルアップに何が必要となるかという手掛かりを得るためである。また、経験年数ごとの課題を見つけ、課題への解決方法を検討するためである。調査協力者の選定は、施設長に研究依頼の許可を得た後、筆者が職員に対して研究の目的や内容を直接説明し、募集を行った。調査協力者の内訳は以下のとおりである。

表1. 調査協力者の内訳

	X私立幼稚園	Y私立保育園	Z認定こども園
新任	A教諭 2年目	B保育士 2年目	C保育教諭 4年目
中堅	D教諭 6年目	E保育士 10年目	F保育教諭 6年目
ベテラン	G教諭 12年目	H保育士 30年目	I保育教諭 19年目

### 3-2. 調査時期

2021年3月～7月に各保育者に対し、20～80分程度の調査を半構造化インタビューの手法を用いて実施した。

調査日は、X私立幼稚園は2021年3月25日、Y私立保育園は2021年7月12日・26日、Z私立認定こども園は2021年4月21日である。

### 3-3. 調査内容及び手続き

保育者が保育の中でどのようなことに課題を感じ、どのような方法で課題を解決しているかということを中心に項目を設定した。具体的には以下の通りである。

- ・保育の中で分からないことや困っていること、課題と感じていることについて  
(子ども、保護者、園、保育内容、クラス運営、日々の業務、その他)
- ・課題をいつ、どこで、どのような方法で解決しているか  
(いつ／保育時間中、保育時間外、休日、どこで／園、家、図書館、その他、どのような／人に相談する、本を調べる、インターネットで調べる、研修を受ける)
- ・保育の中で分からないことや困っていること、課題と覚めることは経験年数によってどのように変化したか
- ・分からないことや困っていることを解決するための情報収集はいつ、どこで、どのような方法で行っているか
- ・情報収集する際に困っていることは何か  
(時間が取れない、解決の仕方が分からない、求める情報に行き着かない、解決に結びつかない、その他)
- ・経験年数によって課題解決方法や課題解決のための情報収集方法は変化したか

### 3-4. 分析方法

9名の保育者へのインタビューデータをテキスト化し、大谷によるSteps for Coding and Theorization (以下、SCATと示す)を用いて分析した<sup>27)</sup>。SCATは、比較的小規模なデータの分析に適しており、4ステップにより構成概念を抽出するコーディングと、構成概念を紡いでストーリーラインを作成し、そこから理論を記述するという手続きからなる質的データ分析手法である。SCATは、セグメント化したテキストを記述し(表2参照)、そのそれぞれに〈1〉テキスト中の注目すべき語句を記入する、〈2〉それを言い換えるためのテキスト外の語句を記入する、〈3〉それを説明するようなテキスト外の概念を記入する、〈4〉そこから浮かび上がるテーマ・構成概念を生成する、という4段階の手順でコードを考へて付していくコーディングを行い、必要に応じて〈5〉に疑問・課題を記入する(表3参照)。次に、テーマ・構成概念を紡いでストーリーラインを記述し(表4参照)、そこから理論を記述する(表5参照)という手続きからなる。

SCATの手法を採用した理由は、保育者が課題をどのような情報収集を用いて解決するか、その具体的状況や過程を知るためである。また、表面的には分からない個人の意識や背景、諸要因の関わり合いを探り、そこに潜在する問題の発見や探索を行うためである。ここでは紙面の都合上、9名のテキストデータの分析のうち、表2～表5は一部の分析過程、表6～表8は分析結果を示す。

### 3-5. 倫理的配慮

本研究は福岡県立大学における研究倫理審査の承認を受けて行うものである(承認番号:

表2. 語りの一部抜粋 (A教諭)

A教諭：①けどやっぱり一番、同じ現場で働いている先生に聞くのが一番だなと思って。その、今までで、そういう子を受け持ったことがある、とかいう先生とかに、とかその、あの、②結構部屋が近い先生とかで、どう思います?とか、その、こうしてみたんですけど、とか、やっぱ聞きやすい先生ばかりなので。なんか全然、③友達とかでも、他の園に勤めてる子でも、なかなか聞けない、怖くて聞けない、みたいな子もやっばいるから、だから、ああ、自分は良かったなあと思って。いや、有難いです。(過去の経験や知識で対応できない時は調べる)そう、そうですね。か、やっぱりその、④補助の先生があの一、すごくベテランの先生だったので、こうしてみたら?とか色々アドバイスを下さって、あ、なんか、自分の考えにはないこともあったから、あ、なるほど、それやってみようとか・・ですかね。(世間話みたいに先輩に相談)そうですね。なんかでも、⑤どうしようかなって、結構悩んだときは主任の先生に、今の時間いいですかーって聞いたりとかしてたんんですけど。

表3. SCAT分析によるテキストデータから構成概念までの形成過程の一部抜粋 (A教諭)

発話者	テキスト	〈1〉テキスト中の注目すべき語句	〈2〉語句の言い換え	〈3〉〈2〉を説明するテキスト外の概念	〈4〉構成概念
A教諭	けどやっぱり、一番、同じ現場で働いている先生に聞くのが一番だなと思って。その、今までで、そういう子を受け持ったことがある、とかいう先生とかに、とかその、あの、結構部屋が近い先生とかで、どう思います?とか、その、こうしてみたんですけど、とか、やっぱ聞きやすい先生ばかりなので。	同じ現場で働いている先生に聞くのが一番だなと思って。/そういう子を受け持ったことがあるとかいう先生とか/結構部屋が近い先生とかで、どう思います?とか、その、こうしてみたんですけど、とか/やっぱ聞きやすい先生ばかりなので。	職場の先生への絶対的信頼感/先輩保育士の経験知を伝授/質問が容易な人間関係	先輩絶対信頼的存在/共感可能環境/経験豊富な人材/相談容易人間関係	経験者への相談重視/相談ハードルの低い職員態度

2020-27)。調査協力園の施設長・協力者には、事前に本研究の目的を研究協力同意書、同意撤回書、インタビュー調査協力依頼書、インタビューガイドを用いて説明し、調査協力の要請を行った。調査への協力は自由意思によるものであり、協力を拒否することが可能であること、調査過程で知り得た情報は研究目的にのみ使用すること、個人が特定されないように配慮すること、インタビュー実施後においても同意撤回ができることを伝え、理解・納得の上で調査の許可・同意を得た。

#### 4. 結果と考察

インタビューの分析から得られた保育者ごとの構成概念とそこから得られた知識・技術獲得方法の特徴を表6～表8に示す。

まず、保育における困り感は経験年数や園に関係なく、製作や手遊び、保育活動内容などの「Ⅰ.保育実践」と個別の配慮が必要な子どもへの対応や保護者からの相談支援などの「Ⅱ.子ども・保護者への対応」の二つに分類できた。この二つのうち、保育者の困り感が強いのは「Ⅱ.子ども・保護者への対応」であり、若手・中堅だけでなくベテランも困り感を抱えている

表 4. ストーリーラインの一部抜粋 (A教諭)

A教諭は困り感の解決にあたって、①【経験者への相談重視】をしている。X幼稚園は②【相談ハードルの低い職員態度】であるため、③【高い相談ハードルによる躊躇】がなく、相談しやすいと感じている。また、相談することで④【他者視点による気づき】が得られるため、⑤【困り感の積極的発信】を行っている。

表 5. 理論記述の一部抜粋 (A教諭)

A教諭にとって一番身近な存在であるベテランの補助職員が役立つ助言をしてくれるため、よく補助職員に相談をしているが、深刻な相談の場合は上司の主任に相談するなど、悩みの内容によって相談する人を変えている。また、職員会議という改まった場ではなく、日常的に相談を行っている。上司や職員の親身な相談助言態度が、A教諭の相談行動をより活発にしていると考えられる。

ことが示された。

また、この二つの困り感に対応するための知識・技術獲得方法は「a. 自分で調べる」と「b. 人への相談」の二つに分類できた。「I. 保育実践」に関する困り感に対応するための知識・技術獲得方法は「a. 自分で調べる」が主であり、「b. 人への相談」が補助的であった。それに対し、「II. 子ども・保護者への対応」に対する困り感では「b. 人への相談」が主であり、「a. 自分で調べる」は補助的であった。これらの傾向の園による違いは見られなかった。しかし、経験年数が長くなるほど「a. 自分で調べる」よりも「b. 人への相談」を重視する傾向が見られた。

#### 4-1. 「a. 自分で調べる」知識・技術獲得方法の特徴と課題

「a. 自分で調べる」知識・技術獲得方法の特徴と課題について述べる。

「a. 自分で調べる」時の主な情報源について、新任は簡単に情報収集ができる【低労力情

報源】のインターネットを活用することが主である。製作物を調べる際は【一目瞭然時短画像検索】を行い、文字情報ではなく画像で完成図を見て調べている。中堅の場合もインターネットを活用しており、“3歳児”“はさみ”“製作”と思いついたキーワードで検索し、ヒットした情報の中から求める情報を絞り込む【たまたまヒット情報絞り込み検索】という方法で情報収集を行っている。インターネット以外に保育雑誌を活用することもあるが、用途は製作物の調べ物という【保育雑誌限定的活用】である。ベテランも保育雑誌や実用書、インターネットを【主力製作検索ツール】として活用し、中でもインターネットを一番多く活用している。全ての園で共通していたのは、「a. 自分で調べる」時、調べる内容は製作や保育実践のアイデア探しといった内容に限定されていた点である。また、論文やより難易度の高い内容の文献を参考にすることにに対して抵抗感が見られ、経験年数によって参考にする情報源がほぼ変わっていない点においても共通していた。

表6. 新任の知識・技術獲得方法の特徴

困り感	保育者	抽出された構成概念	知識・技術獲得方法の特徴	
			a.自分で調べる	b.人への相談
I. 保育実践	A教諭	【容易到達理解情報選択】【容易理解情報価値】【曖昧言語化での情報収集】【クラス状況日常的共有】【困難感自主発信】	保育雑誌やインターネットで調べた内容を元に実践内容を考える	学年で保育実践内容を共有し合う際、必要に応じて助言をもらう
	B保育士	【(保育雑誌) アイデア探し目的活用】【(インターネット・雑誌・過去記録) 日常的活用情報源】【スマホ活用情報収集】【一目瞭然時短画像検索】【低労力情報収集価値】【勤務中ながら相談】	保育雑誌やインターネットで画像検索した内容を元に実践内容を考える	一緒に組んでいる先輩に相談
	C保育教諭	【隙間時間活用情報収集】【見て分かる情報高評価】【(YouTube) 低労力情報源】【簡単便利解決志向】	日常的にインターネットで保育の製作や活動のアイデアを収集	保育の流れや去年の保育実践内容を前年度の担任や先輩に質問
II. 子ども・保護者への対応	A教諭	【学習知識の振り返り活用】【情報信憑性重視】【経験者への相談重視】【相談ハードルの低い職員態度】【外部由来子ども理解】【困惑時専門家アドバイス委託】【困り感の積極的発信】	短大のノートやインターネットを調べるが、インターネットは情報の信憑性の判断が出来ないため、参考程度に留めている	ベテラン補助職員や先輩、外部の専門家に、気になった点を説明し、助言をもらう
	B保育士	【(教科書) 現場ニーズ非合致感】【他者意見獲得ニーズ】【相談容易雰囲気】【多面的視点獲得ニーズ】【その場で質問必要性】【子ども理解・共有スムーズ価値】【同世代親身先輩】	語りなし	一緒に組んでいる先輩に相談その他の先輩や園長に相談
	C保育教諭	【特定分野インターネット優位性】【自己解決可能課題インターネット活用】【絶大信頼ベテラン】【相談第一主義】【ベテランへのアドバイス日常的取得】【子ども対応への先輩相談必要性】	病気など答えのありそうなものはインターネットで調べることもある	子どもに関することは全て先輩に聞く、先輩に子どもの気になる点を説明・相談し、助言をもらう

困り感の解決にあたり、本研究では「I. 保育実践」に関することについて、調査協力者となった9名全員が「a. 自分で調べる」ことで解決していた。「I. 保育実践」に関しては自分で調べても解決出来ないという語りは見られず、自分で調べて解決できているため困り感が低いことが示された。このことは、情報収集の方法を学んでいない保育者においても、保育実践に関する困り感であれば独力でインターネットや保育雑誌、実用書を使って求める情報に行き着くことが出来ていることを示している。

一方、「II. 子ども・保護者への対応」に関しては、自分で調べても解決に至らないことが

多く、新任は【子ども対応への先輩相談必要性】を感じていた。【経験者への相談重視】もしており、園内の【ベテランへのアドバイス日常的取得】をすることで対応していた。中堅の場合も【人への相談ベース解決】を行っており、【頼みの綱的上司】や【先輩の経験参考解決】という園内の人に相談することで対応している。ベテランにおいても【経験年数無関係相談ニーズ】があり、【直接相談志向】のもと、園内の人に聞くということで解決している。

「II. 子ども・保護者への対応」に関しては、独力で必要な情報を集めることが困難なため、「I. 保育実践」に比べると困り感が強いと考



表7. 中堅の知識・技術獲得方法の特徴

困り感	保育者	抽出された構成概念	知識・技術獲得方法の特徴	
			a.自分で調べる	b.人への相談
I. 保育実践	D教諭	【たまたまヒット情報検索】 【(Instagram) 特定分野活用】【情報共有助け合い同期】【自主的積極相談実践】	保育雑誌や実用書、インターネットで調べた内容を元に考える	学年ごとに保育の実践内容を共有し合う
	E保育士	【保育雑誌活用検討】【インターネット簡単キーワード検索】【取捨選択情報収集】 【保育雑誌限定的活用】【(難問題) 主任立場利用対応】【日常的主任相談】【自己解決困難時人依存】	保育雑誌やインターネット、研修を活用して保育のアイデアを探す	悩んだ時は主任に相談
	F保育教諭	【ぱっと見理解容易情報価値】【家にも職場にも相談助言者】	インターネットの動画やイラストの多い実用書を活用	日頃から先輩、母親に相談
II. 子ども・保護者への対応	D教諭	【実態把握ありきの課題解決方針】【頼みの綱的上司】【一人困難対応時上司委託】 【人への相談ベース解決】【園内人的相談有効感】【子ども実態把握ありき課題解決姿勢】	子ども対応についてインターネットで調べたことがない	対応が困難な場合、先輩や上司に相談し助言をもらう
	E保育士	【相談支援連結情報共有】情報共有習慣効果実感【情報共有の必要性認識】 【上下関係無関係協働】【過去プロセス情報ニーズ】【読解厄介情報敬遠】	語りなし	15分の情報共有時間で相談 対応が困難な場合、主任、園長、前年度の担任に相談
	F保育教諭	【ぱっと見理解容易情報価値】【具体的助言評価】【読解努力を必要とする情報回避】 【人・インターネット活用課題解決】【先輩の経験依存解決】【雑談的保育相談】 【親経験あるなしハードル】【経験重ねるのみ方針ステップアップ】 【(現園の) 良好人間関係・相談可能環境への感謝】 【実践的研修ニーズ】	正解がありそうなものはインターネットで調べる	日頃から先輩、母親に相談

えられる。柳ら<sup>28)</sup>や星野ら<sup>29)</sup>は、保育者が子ども・保護者への対応に困り感を抱えていることを報告している。本研究においても特別な配慮の必要な子どもへの対応について特に困り感を感じているという点で一致した。

#### 4-2. 「b. 人への相談」知識・技術獲得方法の特徴と課題

次に「b. 人への相談」知識・技術獲得方法の特徴と課題について述べる。

「I. 保育実践」に関することは、人に聞くこともあるがあくまでも補助的で、基本は自分で調べることで解決している。「II. 子ども・保

護者への対応」に関することは、身近なインターネットや保育雑誌を使っても解決に至っていないため、自分で調べるより園内の人に相談している。この傾向は全ての園で共通していた。理由として、新任(A教諭)が述べたインターネット情報の信憑性におけるリスク【情報信憑性重視】や、子どもの様子という言語化しにくい内容を検索する【曖昧言語化での情報収集】の難しさ、ベテラン(C教諭)が語ったような実際の子どもの様子との不一致からくる【相談第一主義】、【子ども対応への先輩相談必要性】などが挙げられた。園内の人に相談する理由として、子どもの様子を知っていることを

表8. ベテランの知識・技術獲得方法の特徴

困り感	保育者	抽出された構成概念	知識・技術獲得方法の特徴	
			a.自分で調べる	b.人への相談
I. 保育実践	G教諭	【携帯リサーチ当たり前雰囲気】【漠然キーワード検索】【漠然キーワード検索有効感】【画像がある分かりやすい情報源の重視】【高利便性検索ツール活用】【自分と他者の意見比較】【他クラス保育スタイル収集習慣】【多様意見自主的取得】	製作のアイデア探しとしてインターネットを活用、保育雑誌はほぼ見ない	学年ごとに保育の実践内容を共有し合う、悩んだときは先輩に相談
	H保育士	【多方面情報収集】【保育雑誌ニーズカバー限界感】【(雑誌・インターネット)主力製作検索ツール】【視覚情報理解促進実感】【第3者視点ニーズ】	保育雑誌やインターネットで調べた内容を参考に保育実践を考える	主任に聞く時もある
	I 保育教諭	【一目瞭然情報支持派】【限定的人選相談】	保育雑誌やインターネットの動画を参考に保育実践を考える	ほぼ相談せず自分で考える
II. 子ども・保護者への対応	G教諭	【直接相談志向】【実情理解依拠アドバイス願望】【難解情報拒否】【労力過多行程回避】【関係者一致団結支援体制】【担任丸投げNG】【園内垣根レス連携】【(担任の)積極的助言要請行動】【相談者と助言者の両面立場】【経験年数無関係相談ニーズ】【保護者対応困難時先輩頼み】【共通理解容易性重視】【知恵袋の先輩】	インターネットでは調べない	対応が困難な場合は先輩や園長、ベテランのパート職員に相談
	H保育士	【(専門家) 具体的アドバイス有益感】【(専門家解説) 子ども理解促進実感】【一見は百聞にしかず情報共有】【専門家サポート確保】【専門家訪問支援必要性】【(研修) 具体的解説ニーズ】【理論敬遠志向】【実践的情報ニーズ】【(子どものことは) 職員間伝達共有】【いつでもどこでも対話】	語りなし	15分の情報共有時間で相談、対応が困難な場合は外部の専門家に相談
	I 保育教諭	【雑誌重宝活用】【未子育て未経験カバー的情報誌】【(保育雑誌) 実践的情報ツール】【独力解決要請状況】【外部連携希薄状態】【外部専門家連携ニーズ】	主に保育雑誌で調べた内容を参考にしている	ほぼ相談せず自分で考える

理由として挙げる保育者が多かったのは、子どもの様子を言語化し説明することへの苦手意識が表われていると考えられる。

「II. 子ども・保護者への対応」に関することは自分で調べるよりも園内の人に相談する方を選んでいった。その理由として、子どもの様子を実際に知っている同僚に相談する方が、少ない労力で信頼できる情報が得られるため、園内の人への相談を重視する傾向が強いと考えられ

る。園内の人への相談が重視されているということは、相談できる体制や人間関係が築けているかが困り感への解決に非常に重要であることを示唆している。

一方で、保育雑誌よりも難易度の高い国のホームページや論文などはベテランもほとんど参照していないと語っており、専門的な文献に対して【難解情報拒否】や【理論敬遠志向】を示していることから、経験を重ねても情報源の

アップデートは行われていないことが推察される。

しかし、特別な配慮の必要な子どもへの支援には、吉川ら<sup>30)</sup>が指摘するように、子どもの多様な発達状態、家庭の状況、園の友達関係やカリキュラム、環境構成といった環境因子との相互作用も視野に入れて支援体制を構築しなければならない。本研究では、ベテラン（I 保育教諭）は高度な観察力や専門家の視点としての【外部専門家連携ニーズ】があり、ベテラン（H 保育士）は職員間の連携としての【職員間伝達共有】の必要性を感じていた。「I. 保育実践」の困り感と比べて「II. 子ども・保護者への対応」は人的環境やより専門的な知識、同僚や他職種との連携などの求められるスキルが高く、対応の難易度が上がるため、「I. 保育実践」よりも強い困り感を感じていると考えられる。

#### 4-3. 保育者の文字情報への苦手意識と課題

全ての園において、新任からベテランまでが参考にしていく保育雑誌は同じであった。

インターネットで調べる際にはYouTubeやInstagram、Hoicludeなどの保育サイトといった、写真やイラスト、動画を多用した【低労力情報源】を活用し、製作や保育実践について調べる【特定分野活用】が主であった。文部科学省や厚生労働省のホームページは活用されておらず、特別な配慮が必要な子どもへの対応についての記載があることは認識されていない。さらに、書籍については保育雑誌や運動や音楽などの実用書に留まっている。より難易度が高く文字情報の多い保育雑誌や書籍、論文などの情報源には【難解情報拒否】や【理論敬遠志向】を示し、【読解努力を必要とする情報回避】をする傾向が見られる。このことはベテランにお

いても同様であり、国のホームページや論文などの専門的な情報源に対しては「堅い」「難しい」と強い苦手意識から敬遠する傾向が見られる。また、子どもへの対応についてインターネットや文献を使って調べても、そこにある情報が子どもの実態にそのまま当てはまるわけではなく【適用難情報】であるため、労力が大きい割に解決に結びつきにくい【大量労力作業】と感じていることが明らかになった。

これらのことから、保育者は、全体的に文字情報を読むことに対して苦手意識が強いことが示唆された。国のホームページなどの情報を読み解くことにハードルを感じているため、情報源がアップデートされないまま限定されていると考えられる。これにより、子どもの様子など専門的な知識が必要な困り感への対応が人への相談に偏っている面もあると考えられる。

#### 4-4. 相談や指導を行うための人間関係構築の重要性

全ての園で人に相談することが課題解決における主な情報収集方法であった。相談ができるようにするためには、同僚との人間関係が重要であることは明らかである。本研究においても、同僚との人間関係の在り方として【相談ハードルの低い職員態度】や【同世代親身先輩】の存在が、【困り感の積極的発信】や【日常的主任相談】に繋がっていた。【高い相談ハードルによる躊躇】を感じないことで様々な人に相談することができ、その結果、【他者視点による気づき】を得ることや【上下関係無関係協働】に繋がっている。

9名全員が人間関係の重要性や、良い人間関係を築けているから相談が可能であると語っている。特に新任は経験が浅く自分で判断するこ

とが困難であるため、人に相談することは必須である。しかし、新任ほど課題の明確化に困難を感じている、職員との信頼関係が十分に構築できていないなどと、相談することへのハードルが高いと考えられる。小原ら<sup>31)</sup>は、新任保育者は、職場の同僚に助言や支援を求めても、思いを上手く伝えられない、助言や支援を得られていないと感じた時に強い困り感が生じることを指摘している。人に相談するためには、相談ができる人間関係を築く、自分の考えや思いを他の人に適切に伝えるといったソーシャルスキルが必要になる。

インタビューでは、相談の重要性を認識し、園体制や個人の働きかけにより相談の促進を実現しようとしていることが分かった。そのため、本考察では園体制や個人の働きかけに着目した。

個人の働きかけについては、保育者個人のソーシャルスキルが強く影響していると考えられる。先行研究においても、職場に適応し勤務を継続するためにソーシャルスキルを身につけることの重要性が指摘されている<sup>32) 33)</sup>。

相談ができるような良い人間関係を構築するために必要であると考えられるため、ソーシャルスキルに着目した。その結果、人によってコミュニケーションや人間関係の構築に違いがみられた。例えば、X幼稚園のA教諭（新任）とZ認定こども園のG保育教諭（新任）は、新任であるが自ら積極的に先輩や上司に相談している。Y保育園のB保育士（新任）は人見知りで自らコミュニケーションをとることにハードルがあったが、周りの先輩や上司の方から声を掛けてくれたことで相談することへのハードルが下がり、信頼関係が構築できるにつれて自らも【頼みの綱的上司】に、【助け舟要請】をして相

談できるようになっている。3名とも周囲に相談できる人や雰囲気があるため、周りの人の知恵や助けを得ながら対応することができている。このことから、周囲の働きかけが信頼関係を構築するために大きな影響を与えており、なかでも、ベテランによる影響は大きいと考えられる。ベテランの3名とも相談を重視しているが、後輩へのアプローチの仕方はそれぞれ異なっていた。X幼稚園のG教諭（ベテラン）とZ認定こども園のI保育教諭（ベテラン）は、基本的には後輩からの自主的な発信を重視している。一方で、Y保育園のH保育士（ベテラン）は、相談しやすい雰囲気を作るための土台作りとして、自ら頻繁にコミュニケーションをとることで信頼関係を構築し、雑談を通して困り感を引き出すということを意識的に行っている。3名とも相談を重視しているが、それぞれの経験から自分なりの方法で実施していると考えられる。

#### 4-5. 人間関係を構築するための園体制

相談や指導を行うにあたり、園体制も大きな影響を与える。本研究では、情報共有や相談、指導体制について、園による違いが見られた。

例えば、X幼稚園やY保育園では、【経験者への相談重視】をしており、新任にベテランの補助職員をつける環境を作っている。また、【相談容易雰囲気】を大切にし、定期的な情報共有を行うことで、お互いに情報の発信と【人への相談ベース解決】が活発になるようにしている。Y保育園は情報共有の時間がきっかけで相談に繋がっている。守ら<sup>34)</sup>は、「全員が言い合える雰囲気の醸成」が常に行われている園の文化や人間関係は、“保育力向上のための財産の共有化”を進める園の在り方を支える条件で

あり、かつ、こうした在り方を実践してきた結果でもある」と示唆している。園体制としてお互いに情報共有し、サポートする仕組みがあることは、X幼稚園とY保育園の保育者の語りから、相談しやすい雰囲気作りに貢献していると考えられる。

一方で、Z認定こども園は、相談は個人の判断に任せる【独力解決要請状況】である。また、一人担任であるため他の保育者の保育を見る機会が少ないという課題や、会議で困り感を相談しても十分な返答が得られないという課題を抱えていた。高橋<sup>35)</sup>は、ベテラン保育士のコミュニケーション技法をモデルとすることや、同僚と相談することで具体的な関わり方について学んだり、発見したりすることが望ましいとしている。

相談のしやすさは忙しさや人との距離にも影響を受けると考えられる。お手本になるようなベテランが補助という立場で側にいることは、見て学ぶことができるだけでなく、活発な相談にも繋がり、相談や指導が上手くいっているかどうかは、これらの園体制による影響があると考えられる。

しかし、園体制のみを整えれば問題が解決するわけではない。例えば、X幼稚園やY保育園、Z認定こども園の3園全てで意見交換の場として会議を行なっているが、Z認定こども園では会議で十分な返答が得られず、効果的に機能していない状況に陥っていると語っている。これは、会議という園体制があるだけでは課題解決に至るわけではないということを示唆している。Z認定こども園の保育教諭間の人間関係は良く、相談も出来ていることから、会議の場で発言が出ない理由として、ファシリテーションを行うことのできる人がいないことが大きな理

由と考えられる。

ファシリテーションは、人が集まって何かを話し合ったりするときに、人々が遠慮なく発言や参加ができるような場作りや、円滑なコミュニケーションを育むことで意見や感情のやりとりをスムーズにしていく技法である。この場合、会議で意見が出ないという課題は、発信の仕方や意見を引き出すような問いかけの仕方、発言を受容する態度や雰囲気など、ファシリテーションが上手くいっていないことが原因として考えられる。しかし、ファシリテーションという存在自体を認識していないこともあり、会議で発言が出ない原因を個人の発信能力によるものと捉えていると考えられる。これは、園体制を整えても、必要なスキルを持った人材がいなければ効果的に機能しないというリスクを示している。まずは、どのようなスキルが必要なのかを認識することが必要である。園体制としてうまく機能していると考えられるX幼稚園やY保育園においても、相談しやすい雰囲気作りが重要であるという認識はあったが、相談しやすい雰囲気とはどのようなものか、具体的ではなく漠然としたイメージに留まっている。個人の能力に依存しているため、スキルを持った人材がいなくなるとうまく機能しなくなるというリスクがあると考えられる。

#### 4-6. 外部との連携がもたらす専門的な視点による課題解決

新任に限らず中堅やベテランも、新しい情報入手し続ける必要性を感じている。抱える課題の中には、経験だけではカバーが困難な専門的な知識が必要なものもある。X幼稚園は療育センターや外部講師に【困惑時専門家アドバイス委託】を行っている。Y保育園では療育セン

ターや大学教員との連携があるため、外部の専門家からのアドバイスを受ける【相談支援連結情報共有】を行うことで対応している。一方、Z認定こども園は外部との連携はなく、新任、中堅は先輩に相談することで解決している。先輩保育教諭も日頃から後輩の相談に応えられるよう多岐に渡って情報収集を行っており、個人の努力でカバーしている状態である。

外部との連携がある園は外部の専門家の力を借りて課題対応にあたっている。しかし、外部と連携をとるにあたり、外部の人に困り感を説明することにハードルがあることが明らかになった。Y保育園のベテランH保育士は、【専門家訪問支援必要性】を感じており、外部の専門家が園に来て直接子どもの様子を見てもらった方が【一見は百聞にしかず情報共有】ができ、具体的な助言が得られていると感じていることから、保育者が子どもの様子を言語化して伝えることに難しさを感じていることが窺える。

## 5. 総合考察

これまで、保育者の困り感と知識・技術の獲得における課題について述べた。これらを踏まえた上で、現場への支援の在り方について検討する。

第一に、独力での解決において、必要な情報を集める際の課題として、子どもの様子などの困り感を言語化することに難しさがあることが挙げられる。保育には暗黙知がかなりの領域を占めることが指摘されており<sup>36)</sup>、先行研究で挙げたようにベテラン保育者の思考や方略の構造化による暗黙知の可視化の試みがなされている。同様のアプローチがこれらの言語化の難しさへの解決方法として、適用できるのではない

かと考える。しかし、これらの構造化を習得することは困難が予想されるため、今後の検討が必要であるが、まずは保育者が言語化することの重要性に気付くことが必要と考えられる。

保育者の文字情報に対する苦手意識に関しては、まずは良質で信頼のおける情報源の周知を行うことで、独力での情報源の偏りを避けることが可能になると考える。

第二に、人への相談や指導におけるソーシャルスキルや園体制への課題と支援の在り方である。これらのスキルは園児に対する保育とは直接関係がないため、保育者には必要性を認識されていないが、保育者の習熟や困り感に対する解決においては極めて重要な役割を果たしていることを示している。実際、語りからはその必要性は認識されていなかった。そのため、本研究で挙げたような困り感を解決するためにはソーシャルスキルが必要であることを、具体的に示しながら伝えることで、ソーシャルスキルの重要性について気付く必要があると考える。

ソーシャルスキルの教育は保育領域の業界以外で研究が進んでいる。例えば、ファシリテーションは一般企業や医療の領域では研修として行われているため、これらの研修を参考にし、保育の現場でも取り入れてみるのが有効だと考える。

以上より、保育者が困り感に直面した際の独力で可能な解決策は、保育雑誌や実用書、インターネットを使って保育実践に関するものを調べる、ということに限られているということが明らかになった。

各保育者自身での対応が困難な子ども・保護者への対応といったことに関しては、主に園内の人に相談をしている。そのため、相談が困り感へのアプローチにとって重要であり、人的環

境や園体制が整っている場合は、整っていない園よりも困り感に対して解決できる可能性が示唆された。

しかし、人的環境や園体制をうまく機能させていくためには、保育者同士の適切な働きかけが不可欠である。

本研究の語りの分析を通して、保育者自身の働きかけについて、保育者同士の適切な働きかけの必要性は感じていたが、あくまで話しやすい雰囲気作りといった漠然としたイメージに留まっている。また、困り感について自分の中で言語化する方法や、他者から引き出すために必要なソーシャルスキルについては、無自覚であった点が見いだされた。このようなソーシャルスキル獲得の必要性を保育者が意識することで、人的環境や園体制が構築され、保育者間の困り感への相談支援のアプローチが改善される可能性が示唆された。

さらに、インターネットや雑誌から情報を得ること以上に、真に困っており、インターネットなどでは探せなかった課題解決へのアプローチとして対応できる可能性も考えられる。

## 6. 今後の課題

本研究の結果、保育者が課題と感じているのは、子ども・保護者対応などの言語化しにくい分野であり、その分野の知識・技術の収集や相談は人に頼っていることが明らかになった。そして、人への相談や指導については、個人のソーシャルスキルや園体制による影響が大きいことと、それらのスキルに対しての支援が潜在的なニーズとしてあることが明らかになった。ただし、調査協力者が保育者9名と少人数であるため、他の園においても同様の課題がある

か、量的な研究による裏付けも行う必要があると考える。保育者が子ども・保護者対応の言語化や独力での情報収集のどのような部分に難しさを感じているのかを具体的に明らかにし、さらなる分析を行うことも必要である。

また、今回明らかとなった潜在的なニーズの具体化や、ニーズに対して効果があると思われる研修の在り方について検討する必要がある。さらに、相談を行うために必要なソーシャルスキルの意識付けや教育方法について、他領域ではどのように行われているのかについても今後検討していく必要があると考える。

本研究で推察された保育者の文字情報への苦手意識に関しては、他の園においても同様の傾向が見られるのかを検証する必要がある。また、国のホームページなどにある情報源を保育者に紹介し、現場の保育者の反応や評価を確認することも必要だと考える。

## 付記

本稿は、2021年度福岡県立大学大学院人間社会学研究科提出の修士論文（井手）をもとに作成したものを共著者と協議の上、加筆修正を行った。

## 参考・引用文献

- (1) 厚生労働省（2018）保育所保育指針解説，フレーベル館
- (2) 厚生労働省（2017）保育所保育指針，フレーベル館
- (3) 文部科学省（2017）幼稚園教育要領，フレーベル館
- (4) 内閣府・文部科学省・厚生労働省（2017）幼保連携型認定こども園教育・保育要領，フレーベル館
- (5) 細井香（2010）保育・介護労働の現状と課題（そ

- の3) 保育労働者の健康と労働環境および関連要因の検討—児童養護施設および介護施設勤務者との比較から. 淑徳短期大学研究紀要, 49, 67-81
- (6) 上村眞生 (2012) 保育士のメンタルヘルスに関する研究—保育士の経験園数に着目して—. 保育学研究, 50, 53-60
- (7) 木曾陽子 (2011) 「気になる子ども」の保護者との関係における保育士の困り感の変容プロセス—保育士の語りの質的分析より—. 保育学研究 49, 2, 84-95
- (8) 星野真由美・栗山宣夫 (2021) 保育者の「困り感」と「研修内容の要望」調査の分析: 4年間の継続調査から. 育英大学研究紀要, 3, 15-32
- (9) 三好年江 (2012) 保育所における指導計画作成に関する実態調査—保育士へのアンケートをもとに—. 新見公立大学紀要, 33, 169-175
- (10) 柳晋・星野真由美・栗山宣夫 (2017) 保育者の困り感と研修内容の要望について: 幼稚園免許更新講習受講者へのアンケート調査の分析. 育英短期大学幼児教育研究所紀要, 15, 51-67
- (11) 柳晋・星野真由美・栗山宣夫 (2018) 保育者の困り感と研修内容の要望について II: 幼稚園免許更新講習受講者へのアンケート調査の分析. 育英短期大学幼児教育研究所紀要, 15, 51-67
- (12) 古橋啓介・池田孝博・櫻井国芳・伊勢慎 (2017) 田川市における保育士の専門性と研修必要性に関する自己評価. 福岡県立大学人間社会学部紀要, 26, 1, 17-26
- (13) 前掲(8)
- (14) 社会保障審議会児童部会保育専門委員会 (2016) 保育所保育指針の改定に関する議論のとりまとめ, 1-21
- (15) 野澤順子 (2018) 保育者養成課程学生の障害理解に関する情報活用: 障害児保育履修前学生を対象とした調査から. 立教女学院短期大学紀要, 50, 137-144
- (16) 国立教育政策研究所 (2017) 幼児教育の質の向上を支える研究と研修の在り方を考える—幼児教育140年の歴史から未来を考える—, 1-125
- (17) 野崎司春 (2019) 園内研修の実態と園長の認識との関連について: 園長への質問紙調査を通して. 帯広大谷短期大学紀要, 56, 1-8
- (18) 鈴木正敏・淀川裕美・箕輪潤子・椋田善之・森暢子・野口隆子・上田敏丈・中坪史典・門田理世・芦田宏・小田豊・秋田喜代美 (2019) 園内研修の課題と工夫, 方向性に関する研究: 管理職と職員の回答からの検討. 兵庫教育大学研究紀要, 55, 133-140
- (19) 小澤拓大・大坪祥子・三宅貴之・玉城美千子・藤田博・溝口充子 (2017) 新任保育者の適応・熟達化を促進する保育現場の研究. 宮崎学園短期大学紀要, 10, 34-55
- (20) 川島喜美江 (2012) 保育所保育士が課題と感じていること—グループワークを通して考える—. 静岡県立大学短期大学部研究紀要, 26, 85-93
- (21) 阿部美穂子 (2013) 保育士が主体となって取り組む問題解決指向性コンサルテーションが気になる子どもの保育効力感にもたらす効果の検討. 保育学研究, 51, 3, 379-392
- (22) 押山千秋・西村拓一 (2019) 専門的技術向上の効率化のための暗黙知の構造化: 一保育士の専門的発達の可視化に向けて—. 日本心理学会大会発表論文集, 83, 1C-044
- (23) 吾田富士子 (2014) 保育者の成長と現職教育の組織化: 主任保育士の意識と他職種の専門性から. 藤女子大学人間生活学部紀要, 51, 49-56
- (24) 小川圭子・水野智美 (2009) 保育者養成校で扱われている発達障害に関する内容—発達障害に関する新任保育者の知識と困り感との関係から—. 障害理解研究, 11, 11-17
- (25) 原真由美・亀谷美代子・信田和子 (2010) 保育者の情報ニーズと情報収集について—保育者支援のための本学[横浜女子短期大学]図書館の役割—. 横浜女子短期大学紀要, 25, 91-106
- (26) 高濱裕子 (2000) 保育者の熟達化プロセス: 経験



年数と事例に対する対応,発達心理学研究,11,3,200-211

- (27) 大谷尚 (2019) 質的研究の考え方 研究方法論からSCATによる分析まで,名古屋大学出版会
- (28) 前掲(10)(11)
- (29) 前掲(8)
- (30) 吉川晶子・松尾智則・渕上乃里子[他]・岡恒素子・片山瞳・早川公美子・林希・樋渡紗由里 (2009) 保育現場で「気になる」子どもの理解と支援のための一考察—保育者と保育カウンセラーによるコンサルテーションを通して—,中村学園大学・中村学園大学短期大学部研究紀要,41,161-173
- (31) 小原敏郎・義永睦子・田中佑子 (2019) 新卒保育者のリアリティ・ショックの実態と社会的スキルおよびコーピングとの関連,関係学研究,45, 1, 17-29
- (32) 松浦美晴・上地玲子・岡本響子・皆川順・岩永誠 (2020) 保育士リアリティショック尺度の作成,保育学研究,58, 2 - 3, 143-154
- (33) 宇佐美尋子・西智子 (2017) 保育者のソーシャルスキルがストレスに与える影響—女性企業従業員との比較検討—,日本心理学会大会発表論文集,81, 1C-083-1C-083
- (34) 守巧・中野圭子・酒井幸子・矢澤弘美 (2015) 保育現場におけるコンサルテーションの実情と課題の解明：—管理職・ベテラン保育者へのインタビューの質的分析より—,保育学研究,53, 2, 185-193
- (35) 高橋あい (2017) 経験年数別にみた保育士のソーシャルスキルとソーシャルスキル教育ニーズの関連性,法政大学大学院紀要,78,21-33
- (36) 前掲(22)

